

女性を沈黙させる「ネット空間」の闘争性

—SNSと政治的発言に関するインタビュー調査からの考察—

Fight, Conflict, Antagonism of “Internet Space” where women can not speak and communicate—Consideration from interview survey on SNS and political remarks

清水 麻子¹

Asako SHIMIZU

¹東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻博士課程

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

要旨 本研究は、日本の女性が自らの意見を公に向かって発信しない要因を多角的に探るため、SNSなどのネット空間に着目した。東京大学大学院情報学環・学際情報学府林香里研究室が実施した日本の一般女性のインタビューデータを質的分析した結果、女性は家族や近い友人間では日常的に政治を語るのに、ネット空間では批判、中傷、対立、炎上などを恐れて沈黙した。ネット空間のネガティブな闘争性が、女性と政治の距離を遠くさせる要因の一つであることが明らかになった。

キーワード 女性、政治、ネット、SNS、民主主義、闘争性、ネガティブ

1. はじめに—日本で「女性と政治の距離が遠い」社会的要因は？

情報環境の複雑化によって、デジタルと民主主義が交差する時代に入った。近年において顕著なのは、女性たちが性暴力や差別的な性的役割などに怒り、ソーシャル・メディア（以下、「SNS」と表記）などを通じて社会を変えようと行動する「フェミニスト・サイバー・アクティビズム」などと呼ばれる民主主義である。それらは共感を媒介に草の根的に発生し、政治や社会を変えるほどのムーブメントとなることもある（Puente 2011）。各種報道によれば、イギリスでは性暴力被害を告発する#MeToo運動により関係者が辞任や事実上の更迭に追い込まれ、韓国では小・中・高校でのフェミニズム教育の義務化が発表された。また女性の地位が低いサウジアラビアでは、#End Male Guardianship運動によって女性の男性庇護からの独立を目指す大きな動きがあった（Thorsen & Sreedharan 2019）。日本でも、この世界的潮流を受けて#MeToo運動が発生し、女性への差別的な性暴力に怒りの声をあげる抗議活動が繰り広げられた。しかし、セクハラ被害に声をあげ、訴えた女性の側が激しく非難され孤立するなど（ハフポスト日本版 2019）、女性の人権に対して日本社会全体の意識の低さを露呈した。日本において女性と政治の距離が遠い傾向は、各種データでも証明されている。女性の政治参加の指標である「ジェンダー・ギャップ指数」（2018）は149カ国中110位であり、なかでも女性国会議員の比率が193カ国中165位でG20の中で最下位（2018年版列国議会同盟調査）と、世界でも日本の女性の政治参画の下位性が目立っている。この結果を持って、「そもそも日本の女性は総じて政治に関心がない」と、解釈されることもある。しかし、果たしてそう言い切れるのであろうか¹⁾。日本において、これほどまでにジェンダー平等が進まないさまざまな社会的背景は、ジェンダー研究や社会学、政治学などの分野で考察されている。しかし、女性と政治とを結ぶ中間的存在であるメディア、加えて一般女性の意識との関係性において、考察された論考は少ない。そこで本稿は、日本の一般女性が、自らの意見を公に向かって発信しない傾向を引き起こす原因を、インターネットとSNSという2つのメディア媒体によって構成される「ネット空間」に着目しながら探った。

2. 問題の所在—ネット空間は、女性にとって政治的対話が可能な「市民的公共圏」なのか？

インターネットや SNS を通じて誰もが発信者になれる今日は、個人的なさまざまな感情がネット上で飛び交う時代である。#Me Too のような現象が瞬発的に発生する一方、90年代以降にポスト・フェミニズムの観点から既存のフェミニズム運動に対してネット上で理性や倫理を欠いた攻撃を繰り返す「オンライン虐待」「オンラインミソジニー」と呼ばれる行為も深刻さを増している (Eckert 2018, Ging and Siapera 2018)。日本でも、フェミニズムや外国人などを過度に危険視し、「ポリティカル・コレクトネス」への中傷、批判もネット空間に蔓延している。こうしたネット空間の「闘争性」(Fight, Conflict, Antagonism) が、女性が既存の社会や政治に「おかしい」と思っても、声をあげられない理由の一つになっているのではなからうか。

報告者はこの問いを明らかにするため、東京大学大学院の林香里が国際研究として参加する「科研費 (B) 国際比較研究」²⁾ のために得た日本のインタビューデータ (東京近郊在住の男女 78 人、20~70 代) の中から、主に女性 40 人の声のデータを抽出し、質的分析を実施した。データには、日頃はメディアの受け手側にいる一般女性が、家族や友人、会社やネット空間などで話す対話の内容や、ニュースやメディアにどのような意識を抱いているかを示す言葉の情報が集積している。そこで本稿は、日本の一般女性、政治、ネット、SNS を繋ぐ観点からデータの分析を試みた。

1960年代以降の第二派フェミニズムの理論家たちが、ジェンダー平等をめざす観点から主張してきたのは「私的なことは政治的である」というフレーズである。「公」(Public) と「私」(private) の二元性 (Public/Private distinction) を超えたところに、政治の発生を起すことを目指すという考え方である (田村 2005)。これまで家庭の中に隠されていたドメスティック・バイオレンス (DV) をはじとする男女間の権力関係をベースにした暴力や性暴力、伝統的家族制度の下で当然視されてきた家事や子育て、義両親や夫の介護といった性的役割分業の抑圧が「社会問題」として政治に接続し、女性の解放をめざす新しい社会運動に繋がった。

1990年代以降、女性たちが「公」と「私」の境界を超えて政治対話を重ねられる場として議論が重ねられたのは、インターネットであった。2000年代半ばには欧米で「ブログスフィア (blogosphere)」(Harand Tiemayne 2006) という言葉が登場し、ブログがジェンダーに関する新たな公共圏の一つとして注目された。ブログや SNS などにかかわるオンラインでの自己表現は、発言者の思考と感情が他者に向けて可視化され相互参加可能になるという点が評価された (Stavrositu & Sundar 2012)。田中東子 (2013) は、こうしたオンライン上の言説空間は、J.ハーバーマスが提起した「自由主義的なブルジョア公共圏」(Habermas 1973) において、N.フレイザーが唱えた排除されてきた人々による新しい別の「対抗的公共圏」として捉えられるのかという視点から考察を行った。

一方、デジタル環境は年々進化を遂げており、近年、女性たちの「私」から「公」への政治的表出に貢献しているのはブログから SNS に変化を遂げている。先にのべた「ファミニスト・サイバー・アクティビズム」も、SNS を通じて「私」に留まる社会の課題を政治を通じて変化に繋げようとする社会運動の一つであるが、ブログと近年の SNS を通じた社会運動の違いは、その瞬発性と過激さにある。現代における SNS を媒介にした政治的対話は、自身が日常感じている違和感を怒りの声として代弁者 (advocate)、例えば有名人や政治家、インフルエンサーなどを媒介して行われる。人々は、「よくぞ本音を言ってくれた」と、一度も会ったことはない人の声に共感し、「いいね!」を押ししたり、リツイートをしたりする。深い議論をしないまま怒りの感情で集い、繋がり、時に真実を知らぬ人をも巻き込みながら「私」と「公」を断続的に横断し、人々の「私」を「公」に接続する。まさに SNS による革命的民主主義である。

しかし、このような SNS を媒介にした革命的民主主義の特性は、対立や過激さ、ネガティブな言葉や炎上も引きやすい“諸刃の剣”でもある。つまり、異なる意見の人とも対話を重ね、自己の主張の考慮や修正も考慮にいれた熟議民主主義というよりは、異なる相手を敵とみなして過度の対立をあおり、相手を攻撃する男性的・闘争的な要素によって社会を動かすもので、新保守主義や新自由主義ポピュリズムにも傾きやすい危うい一面も持っている。こうした感情的な民主主義は、トランプ大統領など闘争的な政治家による SNS 戦略が台頭する現代において、男の本音の代弁者への支持が集まりやすい現実を加速させはしないだろうか。A.ホックシールドは、トランプ大統領を熱狂的に支持する人々が、同じ道徳的・生物学的集団とともに感じる感情的興奮を、E.デュルケームが唱えた「集会的沸騰」(effervescence collective)³⁾ にあてはまる現象であるとし、多数派の社会運動に利用されていることを指摘した (Hochschild 2016=2018)。多数派の声が少数派の声を凌駕するのであれば、ネットや SNS は、女性にとっての救世主になると単純に評するわけにはいかない。報告では、日本の一般女性が公に言葉を発しない理由を探るとともに、ネットや SNS は #Me Too のように女性の取り巻く現状を劇的に変える可能性を秘めているものの、女性やマイノリティ、弱者の人権を擁護する市民的公共圏であると楽観的に捉えることもできないという両義的な側面から、ネット時代の民主主義に考察を加えた。

3. 分析方法

本発表は、林香里研究室が参加する日本、アメリカ、アルゼンチン、フィンランド、イスラエルによる「科研費 (B) 国際比較研究」を目的に、2017年6月～2018年7月にかけて東京近郊在住を中心とした男女78人 (20～70代) を対象に実施した半構造化インタビューから得たデータ (複数のコーダーによりコーディングされたもの) に占める女性 (40人) を主な分析対象としている。調査対象者はスノボールサンプリングを通じて選定された。データは分析ツール (MAXQDA) を使用して質的分析を実施し、具体的には「政治的発言」「ジェンダー」「ネガティブ」などにコーディングされたインタビューデータを経験的な観点から分析・考察を行った。バランスの関係から SNS 上における男性側の政治的発言についても観察し、参考にした。

4. 調査結果

分析・考察の結果、一般女性たちが日常生活の中で語った「政治への関心」は、ネットやSNSなどを媒介することによって「沈黙」という行為に変化し、家族やごく少数に限定された友人の内部に封じ込められたままになっていることが確認された。SNS上の闘争性、具体的には批判、中傷、対立、炎上などへの嫌悪感から、発信自体を回避しているケースが目立った。

若い世代でSNSを積極的に活用しているケースもあった。しかしコミュニティの中へのリツイートが多く、自らの意見を積極的に書き込むケースは希であった。一方、60代以上の高齢男性の中には、積極的な政治的意見をフェイスブックを使って拡散をするケースがあった。以下、女性側の声から明らかになった2つの視点をジェンダー分析の視点から示す。

1) 女性は日常的に政治を語っていた。しかし夫というより、子どもや女性同士で意見を共有するジェンダー構造が存在した

家族や女性同士の友人と、政治を日常的に話すという女性が目立った。HTさん (59歳) は、ニュースを夫とや娘と日常の会話の延長で話題にしているという。「もうちょっと私たちの生活のことをちゃんと考えてくれる世の中になってほしいというのはありますね。高齢の方が多く、医療費。あと環境。なんていうんでしょう、私たちが生活しやすい世の中にしてほしい」。一方、女性同士で、日常の違和感を語っているという声も多くみられた。RUさん (64歳) は、日本の政治や社会状況が悪化していく感覚を常日頃抱いており、先日はちょうど友人と電話でそんな話題を共有したばかりだという。「若い人たちが、ほら、やっぱり、いい子で育ってるわけじゃないですか。お母さんの言う通りに、大事に育てられて。でも、我慢して育ってるから、思春期になると我慢ができなくなっているんなら犯罪に走ったり。くじけちゃうでしょ?」…。NNさん (57歳) は、ママ友と日常的に政治の話をするという。最近では、公立小学校で海外ブランドの高価な制服が採用されていたという社会の矛盾や、英語改革についてを話題にした。データからは、日本の一般女性が政治に関心がないわけではなく、むしろニュースをきっかけに、教育、医療、福祉、文化、平和などの分野の話題を、自分に惹きつけながら家族や友人とシェアしているケースが確認された。

興味深かったのは、家族内のメンバーのうち、政治を話すのは夫ではなく子ども、という声の多さであった。AYさん (44歳) は、夫ではなく幼い娘と政治の話をするという。理由について「夫はどちらかと言うと、固まった思想じゃないけれど、偏ってるかなという部分もあるので。政治とかの話は夫とはしない事に私は決めているから」…。MKさん (52歳) も先日、一緒に住む19歳と17歳の子ども2人と選挙の投票率について話し合った。「選挙の投票率ってどのくらいだと思うって話をして。全員だと100%でしょ、どのくらいだと思うって訊いたら70%って言うから、(もっと低くて) 26. いくつだよみたいな話をして、かなり驚かれて」…。TTさん (45歳) は、教育目的で子どもとの会話で政治をよく話題にするという。米朝会談が開かれるニュースを観たときには「『アメリカの人と、じゃあ、北朝鮮の人が会う、どこで会うの?』って。『真ん中だからハワイじゃないか?』とか。そういう話をして。『2人と仲良くできる国で会うんじゃないかな?』『じゃあ、日本はあんまり仲良くないな』と」…。夫とは政治の話せず、子どもや女性の友人と政治を話すという女性たちの声から推測されるのは、「妻の政治的意見は間違っている」「子どもの教育は女が担うべきである」などといった家族内の男女の権力関係 (支配・被支配) が産み出す様々なジェンダー構造の存在であった。

2) SNS など多数の人が集まる公的領域では発言を避けていた。ネット空間が、女性の声の「抑圧装置」として機能していた

一方で、家族や親しい親戚、友人とは政治な話題を話すのに、不特定多数の人が集まるネットや SNS、会社などの公的領域では、女性たちは政治を語らなかつた。意見を発信しない原因にインターネットや SNS をあげる女性が目立っていた。

AYさん (59歳) は、家族や友人とよく政治の話題を話す。学生時代の友人で集まったする機会にも、軽く政治の話もする。友人がやセクハラ関係のニュースについての意見を SNS に書いていたため、「いいね!」も押した。しかし、公に向けて自ら

発信はしないという。「政治関係はそんなに書き込みしないようにわざと。自分で制限しているとかいうわけではなくて、なんとなく」。MTさん(45歳)さんは、一緒に働く6歳年下の女性のいとこと、医療費のことなど政治的なことを話題にする。気になるニュースをリツイートすることもある。しかし、デリケートな慰安婦問題などは、周囲にも話さないし、ネットで発信もしないという。

女性たちが、SNSなどで政治的な意見を発しないのは、インターネットやSNSなどのネット空間に起因する声が多くみられた。そこで、ネット空間の「何に」嫌悪感を抱くのかを分析した。結果は以下のように大きく4つに分類された。ネット空間が、ジェンダー的観点から女性の声の「抑圧装置」として機能しているという結論が、導き出された。

SNSなどのネット空間で発言しない理由は、大きく4つ

① 批判、中傷、対立、炎上があふれるネット空間が嫌

まずは政治的なことに関心が高い女性は、ネットで批判や中傷などを受けることを恐れ、SNSと距離を置く様子が浮き彫りになった。自らへの攻撃へのリスクを避ける傾向がみられた。例えば女性解放問題に関心があり、80年代からアジア女性資料センターや、戦時中の女性への性暴力問題にかかわっているUOさん(66歳)は、SNSはまったくやらないことにしているという。「(女性解放運動は)ずっと、1980年代からやっています。だから、ちょっと嫌がらせがあるわけなんですね。なんか変なハガキが自宅に来たりね。ですから私はなるべくツイートとかそういうのをやらないようにしてます」…。

「(SNSは)批判が多くて。自民党への批判とか、個人的な政治家への…。(開くと)映像が出て、何を言っているんだこいつはみたいな、批判が多くて。美しくない」と話すRSさん(55歳)も、SNSをあえて避けている。先日は、安倍政権の憲法改正を懸念し、平和のために憲法9条を守ろう思ってフェイスブックで発言しようとしたところ、対立や攻撃が多くその場を退出したという。「『Facebook 憲法9条の会』という会に入ってたんです。安倍政権が憲法改正を検討していることに怒り、共産党に『がんばれ』の意味を込めて。意見を言ってみたの。そしたら、すごい『いいね!』も多い。でもそのうち共産党ばかりの人が、『何もわからないのに意見言いやがって』みたいなかんじの意見で、その中で私以外の人たちがバチバチ言い合ってた。うわ、なんだこれほど。私は9条を守りたいっていう気持ちはあるんですけど、この人達は、それを一緒に守ってこうって思っている人たちじゃないんだ、自分たちの主義主張を貫きたいだけなんだというふうに思った」と指摘し、フェイスブックを「自分とちょっと意見が違う人を受け入れるキャパがない人達がいっぱいいる」場所だと表現した。

KEさん(25歳)は、デジタルネイティブ世代であるが、SNSではあまりニュースをシェアしない。「社会的なことはあんまりリツイートはしない。ニュースに『こう思った』とかって感想をつけると、いろんな人は感想を返してくるんじゃないですか。政治的な話を友達にしない方がいいかな。友達によっても応援する政権が違ったりするって、考え方もいろいろあるの。それをSNSに言わなくていいって思うので」と、友人との対立を避けるためにSNSと距離を置いていることを明かした。

政治的な発言に関係しなくても、ネットの攻撃性が嫌で、発言を控える女性の姿が目立った。「ネットって良し悪しだよ。だって人の批判、平気でするでしょ。嫌だ」と指摘するMSさん(53歳)は、かつて自らがいじめされた経験と重ね、「なんで人を貶めれるの? 批判するんだったら自分ちゃんとしてんの!」と、ネット空間を「卑怯なもの」と表現した。NNさん(57歳)は、「なにか突出したことをリツイートしただけでも、絡んでくる人は絡んできます」と、攻撃されるレベルに達しないような関わり方を心がけているという。ほかにも「ツイッターなどを読んで傷ついてる知人、いっぱいいるんですよ。中傷されてね。誤解されたり」(RUさん、64歳)という声もあった。

② 身近な人間関係で誤解を生むことを避けたい

対面で話さないために人間同士の対立や誤解を生むという理由からネット空間に忌避感を抱く声も散見された。「私はメール自体をあまりいいと思ってないんですね。うちの組合ですごい解散危機がありまして、それすべてメールが原因だったんですよ。メールって大事なことはしゃいけないうって思ったんですよ。大事なことはちゃんと直接会って話し合わなきゃいけないと思って」(RUさん、64歳)という声や、「悪口で炎上してる友達がいる。かなりエグイ話をラインで、それはそれは長い文章のやりとりをしてる時期があった。だから夜中でも何時間も…。話せばいいのにね。それをなぜかラインでね」(AKさん、47歳)という顔の見えない関係の中でのコミュニケーションに、嫌悪感を示した。

SNS時代の子育ては、特有の悩みも浮上するようであった。YIさん(48歳)は、子ども同士のライン使用で起きたトラブルについて「ちょっと使った言葉がすごいきつくて、いじめみたいな感じの印象になった。グループだと一人がそういうきついことやるっていうと、皆もノって一緒に同調しちゃうみたいで」と、複雑化したデジタル環境下での子どもたちへの悪影響を

心配した。YUさん（27歳）さんは、フェイスブックで、会社の知人男性から、からまれる経験をしているという。「だからメッセージだけはブロックします。会社では全然会わない人だし、別に会わないからいいかなと思っていますが、どう返事したらいいのかわからない。そんなオジサンメールみたいのが来る」と、面倒と思いつつもやりすごしている日常を打ち明けている。同じくSNS世代のNさん（26歳）は最近、フェイスブックでの発言や使用をやめたという。その理由としてあげたのが、年上の人との人間関係の面倒さ。「フェイスブックには立場が上の人とか自分の先輩とかももっと上にもっと上に当たる人が多くなりすぎてプライベートも載せるのもちょっと嫌だし。あとは、例えば今こうこういう活動してますみたいなことを乗つけたときに こんな投稿すんなよって思う人もいますよ」と語った。KOさん（64歳）は、「あまりラインってね、好きじゃない。既読などをいつも見張ってなきゃならないって、嫌なの」と、SNSを常にチェックしなければならない圧力に言及した。YIさん（48歳）は、ママ友との間で使うラインで気を遣うのがストレスになっているという。「お母さんの世界ももうねえ、いろんなもの使いこなせないと『使えないヤツ』になっちゃう時代だと思うから、つらいな。うるさくつぶやきすぎてねえ、皆、「うざい」って思うし。結構厳しい世界なんです」。ATさん（44歳）は「つながりたくない人とつながっちゃいそうだから」と、SNSは一切やっていないという。

③ SNSを技術的に使いこなせない

SNSを技術的に使いこなせないという声もあった。「うわべな部分だけしかまだ使えてないなあっていう感じがしてます。やっぱりフェイスブックとかツイッターとかでも、公共に発信していくのでいろんな注意点あるんだろうなとか思うと尻込みしてしまってなかなか始められない」（RAさん、34歳）という声や、フェイスブックもツイッター、インスタグラムなどに登録はしているが、どれも使いこなせていないという（RSさん、55歳）は「私、SNSが好きじゃないし、得意じゃない。だから、よっぽどじゃないと触りません。実は機械類好きじゃないです。しょうがないから仕事のために使っている」と話した。

④ 個人情報漏洩や、だまされることが怖い

不特定多数に開かれたネット空間に、個人情報の漏洩を懸念して、自らの情報をアップすることへの忌避感がみられた。「最近気になるのはセキュリティです。乗っ取られた人がいて、それがお友達だったので、変な、認証番号教えて下さい、みたいなのが来て」（ETさん、48歳）、「管理が不安ですし、個人情報もそれだけ漏れる危機感がありますので、できればほんとにもうほんとには本音を言えばガラ携でいたいくらいです」（JMさん、44歳）など、セキュリティを心配する声が相次いだ。

また安全を守るために SNSに書き込む事柄は最小限にし、広い範囲には公開はしないという女性もいた。JMさん（44歳）は、「結局、写真は永遠にシェアされちゃうので。まあ友人範囲内の設定にしています」。「元カレに……フェイスブックのパスワードを教えたんですね。それで、勝手にハッキングされて。私のももとのパスワードを変えて、別のものにして、みたくない。写真を全部、昔の写真だったりとか。それがハッキングされたせいで、開けなくなって、前の写真を見直したり、昔の友達の連絡（先）とかも見れない事態になった」（LKさん、21歳）という声もあった。

5. 考察・今後の課題—日常のおしゃべりを、建設的な議論と民主主義につなげるために

本稿では、一般の女性が家族や親しい友人間では日常の違和感や政治的対話を繰り広げているのに、ネットやSNS上にはネガティブな闘争性があふれ、女性が意見を発信できない構造があることを示した。客観的にみると、匿名性の高いネット空間では、女性たちは声をあげやすいはずである。しかし本稿では、逆に「ネット空間では発言することはできない」という矛盾した結果が浮き彫りになった。

声大きい人だけが意見を発し、その他の人は沈黙する。この状態は、健全な民主主義が働いている状況とはいえない。また、勇気をもって声をあげた人が危険な状態に陥ったり、個人としての暮らしが営めないような事態になれば、声をあげられない。本来は、あえて大きな声をあげなくても社会の中で救済される仕組みが整っていることが理想である。

これから必要になってくるのは、声をあげた人を1人にしない仕組みと、一般女性も日常の違和感を語りながら建設的な議論が進められるような闘争性を軽減したネット空間ではなかるうか。もちろん人々が面と向かって対話を重ねられることが理想だが、ネットやSNSがない時代に遡ることはできない。

林香里は、I.ヤングが提唱した「コミュニケーション・デモクラシー」（Young 1996）について触れ、ヤングは「単に“女の日常会話”を政治過程へ編入することを提案しているのではなく、人間の何気ない会話さえも『理性の討議』の片鱗なのであり、かえってそうした日常の言語行為にこそ、これまで『公的領域』において見えなかった問題を見えるものにする原動力、

つまり新たな公共圏を切り開くポテンシャルがあることを強調している」と指摘した（林2002）。

二項対立の短い怒りの代弁によって社会が振動し、極端な意見のみが分極化する現代にあるからこそ、林やヤングの言う「理性の討議」を、公に向かつては発言しない一般の女性を含めて進めていくことがより必要である。同時に具体的にどのような形で、女性たちのおしゃべりから「理性の討議」を引き出せるのか。その点も今後の考察で深めていくことにしたい。

また本稿のインタビューデータは、大半が東京近郊の首都圏在住者であり、地方に住む女性たちの声は反映されていない。そのため本調査結果に都市部の片寄りがあるのは避けられない点も、ここで記しておく。

補注

- 1) 政治学者の大山七穂（2016）は、女性の政治的関心が男性より低い背景には、「政治」が往々にして男性の視点に依拠されたものであり、女性の視点が欠如しているという政治世界の偏りを指摘している。また金相美（2018）は、2013年7月21日に行われた参議院議員通常選挙時に男女有権者990人を対象にウェブアンケート調査を行った結果、政治関連イシュー的な政治知識においては女性有権者の知識習得度が低いことを明らかにし、政治社会化における男女差がその背景に存在している可能性について考察している。これらの論考は、参考文献を参照。
- 2) 本研究は、科学研究費補助金基盤研究(B)「SNS上のニュース「消費」がもたらすメディア・システムの変容に関する国際比較研究」（研究代表者：林香里、課題番号17H01833）の助成を受けた。
- 3) Aホックシールドによれば、「集合的沸騰」（effervescence collective）はE.デュルケームの著書『宗教生活の基本形態—オーストラリアにおけるトーテム体系』（山崎亮訳、ちくま文芸文庫）の中で、同じ道徳的集団あるいは生物学的集団の成員とみなす仲間とともに感じる感情的興奮のこととして概念化されている。

参考文献

- 1) Eckert, Sine, 2018, "Fighting for Recognition: Online Abuse of Women Bloggers in Germany, Switzerland, the United Kingdom, and the United States," *New Media & Society*: 20(4): 1282-1302.
- 2) Ging, Debbie and Sapea Eugenia, 2018, "Special Issue on Online Misogyny" *Feminist Media Studies*: 18(4): 515-524.
- 3) Habermas, Jürgen, 1973, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft* (細谷貞雄訳, 1973, 『公共性の構造転換』 未来社。)
- 4) Hap, Dustin and Tiemayne Mark, 2006, "The Gendered Blogosphere: Examining Inequality using Network and Feminist Theory" *Journalism & Mass Communication Quarterly*: 83(2): 247-264.
- 5) ハフポスト日本版編集部「伊藤静織さんが語る“Me Too”。わざわざ声をあげなくてもいい社会を目指したい」（2019年04月18日 ハフポスト日本版）
https://www.huffpost.jp/entry/shioitometochufftalk.jp_5cb68528e4f01efe3b8f9fc
- 6) 林香里, 2002, 「マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心」 新曜社。
- 7) Hochschild, Arlie R., 2016, *Strangers in their own land: anger and mourning on the American night*. (布施 由紀子訳, 2018, 『壁の向こうの住人たち: アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』 岩波書店。)
- 8) 井上久美枝・千田有紀・寺園通江・野田聖子・明珍美紀・山口香・渡辺えり・角田由紀子「#MeToo日本社会とセクハラ」『女性展望=Women's perspective』201807, (693)9-14.
- 9) 金相美, 2018, 「ジェンダー化された政治コミュニケーション：若年層女性の政治認識と政治参加を中心に」『社会情報学』6(3)49-62.
- 10) Nuñez, Puente Sonia, 2011, "Feminist Cyberactivism: Violence Against Women, Internet Politics, and Spanish Feminist Praxis Online" *Continuum*: 25(3): 333-346.
- 11) 大山七穂, 2016, 「第5章 女性と政治」『NWEC実践研究』88-109.
- 12) Puente, S(2011), "Feminist cyberactivism: Violence against women", *Continuum: Journal of Media & Cultural Studies*, Routledge.
- 13) 田中東子, 2013, 「オンライン空間と女性たちによる表現文化の分析可能性(女性による表現文化の現在とメディア)」『マス・コミュニケーション研究』83: 75-93.
- 14) Stavitski, Camen and Sundar, S. Shyam., 2012, "Does Blogging Empower Women? Exploring the Role of Agency and Community" *Journal of Computer-Mediated Communication*: 17, International Communication Association, 369-386.
- 15) 田村哲樹, 2005, 「フェミニズムは公私区分を必要とするのか?」『政治思想研究』5: 37-60.
- 16) Thorsen, Einar and Seedharan Chindu, 2019, "End Male Guardianship: Women's Rights, Social Media and the Arab Public Sphere" *New Media & Society*: 21(5): 1121-1140.
- 17) Young Iris Marion, 1996, "Communication and the Other: Beyond Deliberative Democracy", Benhabib, Seyla (eds), *Democracy and Difference: Contesting the Boundaries of the Political*, Princeton University Press.